

第2回高知県における特別支援学校の再編振興に関する検討委員会

1 日 時 平成27年5月26日(火) 18:30~20:30

2 場 所 高知県教育センター分館

3 出席者 委員12名中10名出席、事務局12名

4 議 題

(1) 事務局からの説明

① 第1回高知県における特別支援学校の再編振興に関する検討委員会において出された質問等について

② 高知江の口養護学校のアンケート調査結果等について

(2) 今後の高知県の病弱教育に必要な教育内容について

「多様なニーズに的確に対応するため、どのような教育内容及び教育課程を有する学校とするか」

① 社会性(コミュニケーション、対人関係、集団参加など)を、いかに効果的に育成して行くのか。

② 多様な生徒、多様な進路に対応する高等部の教育内容及び教育課程にどんな特色をもたせるのか。

6 協議の要旨

(1) 事務局からの説明に対する質疑・応答・意見

① 第1回高知県における特別支援学校の再編振興に関する検討委員会において出された質問等について

○ 就労の状況について説明がありましたが、企業側が障害のある方を受け入れる時に、どのような体制を整えればいいですか。

A: まず大切なことは、個々のお子さんの障害の特性を理解していただくことが重要であると考えます。

○ 高知江の口養護学校の進路には、一般就労が無いようですが、その理由はどのようなことですか。

A: 高知江の口養護学校の高等部は、普通科を置き、学習保障、進学保障を中心の教育課程を編成しています。知的障害の特別支援学校は、就労支援のための職業教育に力を入れており、一般就職が多くなっています。

○ 高知江の口養護学校の進路は進学が多いが、就職を希望する人は潜在的にはいるということでしょうか。

A: 一般就労や福祉的就労の希望が近年出てきている状況です。

○ 徳島県立みなと高等学園の紹介をして欲しいという要望がありますが、後ほど説明がありますか。

A: 今回は時間的に難しいので、次回以降、説明するよういたします。

② 高知江の口養護学校のアンケート調査結果等について出された質問・意見について

- 保護者のご意見で、社会に出て一人立していく時に、学校とのギャップについて心配がありましたが、卒業生について追跡調査をされていますか。
A：県の事業にアフターケア事業というのがあり、各学校の進路指導部を中心に、卒業生がどのような状況にあるのか把握しています。高知江の口養護学校のアフターケアについては、連絡が取れないというケースもありますので100%というわけではありませんが、卒業生全員に行うよう努力しています。
- 生徒・保護者・教職員のアンケート調査結果を聞きましたが、この中に要望・意見としてしっかり出てきているので、これを重視して再編振興を検討していただきたいと思います。
- 寄宿舎一部屋に基本的に5人部屋となっており、現状やプライバシーを考えると3人程度が良いのではというアンケートの意見がありましたが、ノーマライゼーションの時代、また、心身症とか精神的な疾患の子どもが増えている状況を見ると、個室も検討すべきだと思います。
- 通学の困難な場合のみの入舎ではなく、生活リズムを整えたりするための入舎等、教育入舎も必要だと思います。
- 居住地校交流の推進とありましたが、居住地校においてうまくいかなかったケースもあるので、特別支援学校がある地域（小学校・中学校・高等学校、地域の企業、医療機関、福祉施設等）の交流共同教育も考えるべきではないでしょうか。
- 高知江の口養護学校に転学しても、不登校状態にあるお子さんもいるようですが、単位制や通信制、あるいはICT機器を活用した通信教育のようなことも考えても良いのではないのでしょうか。
- 高知江の口養護学校のセンター的機能として、通級的な支援ができるのではないかと思います。

(2) 今後の高知県の病弱教育に必要な教育内容についての質疑・応答・意見

① 今後の高知県の病弱教育に必要な教育内容について

「社会性（コミュニケーション、対人関係、集団参加など）を、いかに効果的に育成して行くのか。」

- 高知江の口養護学校は、当初は慢性疾患のお子さんが中心でしたが、そこへ、心身症などの発達障害の二次障害的な子どもや不登校のお子さんも入学してきている状況があります。今後の必要な教育内容を考えるには、どこまでの範囲の子どもを受け入れていくのかで変わってくると思います。

- 慢性疾患や二次障害、心身症のお子さんにとっては、命にかかわることもあるので医療等の関係機関と結びついていることが大事です。
- 社会性、コミュニケーション能力、対人関係能力というのは多くの集団にいるから身に着くというものではないと思います。安心・安全な守られた小集団の中で丁寧に対応して、経験を重ねて身に付くものだと思います。そうすると、少々大きな集団へいっても慣れていくのではないかと思います。
- 受け入れるお子さんの範囲が決まると、教育課程の多様化の課題が出てきます。慢性疾患や二次障害や心身症等の軽いお子さんで知的には問題がない方は、かなり難しい学習もできると思いますが、そういったお子さんは居住する学校へ帰る可能性もあります。
- 今後の必要な教育内容を考えるには、どこまでの範囲のお子さんを受け入れていくのかで変わってくるのではないかと思いますというご意見についてはどうでしょうか。

A：病弱特別支援学校の対象となるお子さんは、お配りした教育支援資料にある、病気のお子さんが対象になります。心身症を含め多様なお子さんに行きわたるだけの確に対応できる学校づくりが必要ではないかと考えます。
- 社会性とかコミュニケーションについてですが、普通高校や大学を出て、会社に入ってきて、社会性のあるコミュニケーションがとれるかといえば、そうでない方も実際にはいます。学校で教えるコミュニケーションはどのレベルまでなのか考える必要があると思います。
- 徳島県立みなと高等学園の校長・教頭先生から学校で大切にしている6つの話を聞きました。①働く意欲があり、遅刻や無断欠勤がない。②一日の仕事をコンスタントにこなせる体力があること。③あいさつや返事がしっかりとできること。④清潔への意識があり、身だしなみが整っていること。⑤仕事の遂行に必要なコミュニケーションがとれること。⑥困ったときにどうしたらいいかわかり、助けを求めることができること。ということでした。特別支援学校においては、こういったところを大切にコツコツと支援・指導していくことが専門性でありスペシャリストではないかと思います。
- 特別支援学校のお子さんたちは、学校内や特別支援学校同士で関わる人が多いと思います。通常の学校との関わりとか、その他の関わりや就労体験など、いろんな体験をさせることで、自分に何が合っているのか、どんな力があるのかが分かるのではないのでしょうか。また、いろんな体験をすることでコミュニケーション力も伸ばせると思いますし、将来の就職にも繋がると思います。
- 社会性やコミュニケーション力をつけていく上で、いろいろなタイプのお子さんがあり、繰り返しの経験で力がつくお子さんもいれば、繰り返しでは難しいお子さんもいますし、持続的に支援を上手に繋げていかないといけないお子さんもいます。また、発達障害の特性の強いお子さんの中には、学校は学校、

家庭は家庭で切り替えてしまい、学校でやっていることがうまく、家庭や社会に繋がらないお子さんもいます。だから、如何に本人のモチベーションを上げるか、如何に社会性を効果的につけていくのかを考えると、すごく個別性を求められると思います。

- 非常に難しい課題ですが、まずは、児童生徒と先生との間の一対一でしっかり人間関係をつくり、そこから周りにどう広めていくかが重要だと思います。その時には、児童生徒がどういう状態にあるのか見立てができる先生が必要だと思います。見立てができると、必要な支援が分かるわけです。また、社会性やコミュニケーションといっても児童生徒の状態によって、求められる力は個々に違ってきます。だからこそ、どういう状態でそういう状況に陥っているのかしっかり見立て理解し、必要な支援を考えられる先生が必要だと思います。

② 今後の高知県の病弱教育に必要な教育内容について

「多様な生徒、多様な進路に対応する高等部の教育内容及び教育課程にどんな特色をもたせるのか。」

- 現在、教育課程にはⅠ型・Ⅱ型がありますが、進路等の状況を考えると、この教育課程のみでよいのか検討する必要があるのではないかと思います。
- 直接は関係ないかもしれませんが、中学校の3年生で知的には問題がない。病弱でもない。発達障害のグレーゾーンで診断はない。しかし、公立の高等学校へ行くのは難しい行き場のないお子さんがいます。北校の通信制とかありますけど、遠いところの方は難しい。公立以外の学校も考えられると思いますが、経済的に難しいといったお子さんがいます。しかし、そういった学校で頑張って短大や大学に行ったお子さんもたくさんいます。
- 社会性や教育課程を考えていく上で、多様なニーズに的確に対応するためには、100のニーズがあれば200の対応ができるぐらいの知識であったり、支援方法であったり、専門性だったりがないと一人一人への対応はできないのではないのでしょうか。
- 多様性を求めるなら個別性が必要になり、そのための環境であったり、人を含めた資源であったりが必要になるのではないのでしょうか。その場合、多様なお子さんを受け入れる範囲も連動してくるのではないかと思います。